中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1330

正しく思惟する人には、まだ生じていないもろもろの煩悩は生じないし、さらに生じているもろもろの煩悩は断たれる。（釈迦）

＜解説＞正しく思惟するとは、根源的に物事を見て思惟する、つまり、煩悩（煩わし悩ます心のはたらき）がいかに発生して、さらに大きくなっていくかについて知ること。真実に適応するよう、無常であるものは無常であると正しく認識することをいう。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.1 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1331

自ら自己を克服した人にとって、自己は自己の友である。しかし自己を制していない人にとって、自己はまさに敵のように敵対する。（『バガヴァッド・ギーター』）

＜解説＞自己こそ自己の友であり、また、自己こそ自己の敵であると述べる。その違いはどこから生じるのか。自己を制御しているかどうかによる。であるから、自ら自己を高めるべきであり、自己を沈めてはいけない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.2 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1332

学びて然る後に足らざるを知り、教えて然る後に困むを知る。（『礼記』）

＜解説＞学んでみてはじめて、自分がまだ勉強の足らないことを知り、さらに学ばなくてはと思う。また、人に教えてみてはじめて、自分が分かっていなかったことを知って困惑する。これは、私たちが日常においても気づくことだ。説明し教えてみて、初めて自分の理解が整理されることも少なくない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.3 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1333

念念止まらず、日々遷流して無常迅速なること、眼前の道理なり、知識経巻の教えを待つべからず。（『正法眼蔵随聞記』）

＜解説＞止まることなく、毎日移り変わって、人の世の変化が速いことは、落ち着いて観察すると誰にでも、すぐにわかる道理である。この無常が極まりないことは、とくに指導者や経典の教えを待つまでもなく、実感できることだ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.4 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1334

伝統のうちで論理的に首尾一貫している部分のみが、感官の確証よりもすぐれたものとして受けとられるべきであり、伝統全体を受けとってはならない。

（ラーダークリシュナン）

＜解説＞伝統はこれまで長く受け継がれてきた点では真実を含んでいるが、伝統それ自体は絶えず批判を受けながら進歩するべきものである。保守的な部分と批判的な精神がつねに密接に関わり合い助け合っている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.5 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1335

本能を完全に押さえ込むと、身体・精神的バランスが崩れてしまう。また、本能をまったくほしいままにすると、やはり身体・精神的バランスを崩してしまう。

（ラーダークリシュナン）

＜解説＞仏教では中道を勧める。バランスのとれた正しい道である。心身を苦しめすぎるほどの厳しさもよくないが、しかし、欲望のままに過ごすのもよくない。ちょうどよいコントロールされた実践が必要だ。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.6 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1336

ある人は、すでに心に汚れがないのに「私には汚れはない」とありのままに事実を知ることがない、「それは過ちである」。

（釈迦）

＜解説＞よごれがないからいいようなものであるが、それでは結局は堕落してしまう可能性があるという。たとえば、それは青銅の鉢がはじめはきれいであっても、上手に用いず、手入れすることもなく放置すれば、時がたつと汚れてしまうようなものだという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.7 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1337

覆われた人々には闇がある、正しく見ない人々には暗黒がある。善良なる人々には開顕（かいけん）される。あたかも見る人々には光明があるようなものである。

（釈迦）

＜解説＞真実（理法）を見るこころを開かないと、当然であるが、苦しみを克服する道は見えてこない。安らぎはすぐ近くにあるのに、それを知ることができない。近くに、自分自身の内にあるのだが。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.8 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1338

みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修行僧よ。自己を護り、正しい念いをたもてば、汝は安楽に住するであろう。

（釈迦）

＜解説＞自己の制御について詳しく述べる。自分こそ自分の主であるがゆえ、自らを見つめ、戒め、反省し、そのよき心を持続させよう。実践する自分を忘れない努力が大切である。それで安らぎの境地へと近づくことができるという。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.9 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1339

愚人から称賛されることもあり、また識者から非難されることもある。愚者から称賛されるよりは、識者から非難されるほうがすぐれている。

（『テーラガーター』）

＜解説＞意識すべき基準は、称賛や非難ではない。相手のことばによって、自らをよりよい方向へ導くことができるかどうかだ。よいアドバイスには厳しい言葉でも素直に従い、悪に導く甘い言葉には従わない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.10 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1340

当に断ずべくして断ぜざれば、返りて其の乱を招く。

（『碧巌録』）

＜解説＞決断をなすべき時に決断しないと、かえって混乱を招いてしまい、災いが生じる。私たちの生活、人生においても、なすべきタイミングがある。たとえば、教えを説くことに関しても、そのなすべき時を知って適切に行わなければ、それは相手を導くどころか、かえって迷わすことにもなる。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.11 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1341

事窮まり勢い蹙まるの人は、当に其の初心を原ぬべし。

（『菜根譚』）

＜解説＞事に行き詰まり、かつての勢力が衰えてゆきづまった人は、あわてず、最初の段階、出発点をもういちど思い出して立ち返ってみるべきである。「蹙まる」とは「ちぢまりおとろえること」の意味。なお、「業績を成し遂げた人は、将来の行く末をよく見極めるのが大切だ」とも教えている。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.12 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心

山陰中央新報（総合）

中村 元 慈しみの心 No.1342

信仰あり、徳行そなわり、名声と繁栄を受けている人は、いかなる地方におもむこうとも、そこで尊ばれる。（釈迦）

＜解説＞信仰があって、戒めにより徳行ある人は、名声と繁栄を得るであろうし、また、それは自然の流れ、法則であるかのように、たとえどこにいこうとも多くの人々の尊敬を受けることになる。よい人々はどこにいようとも輝くのである。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.14 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1343

謹んで参玄の人にもうす、光陰虚しく度ることなかれ。（『参同契』）

＜解説＞教えの要点を述べた後で「あらためて仏道を実践する人に申し上げる」と語られるまとめの言葉。いまここに学ぶべき道がある。決して一瞬一瞬、その時間を無駄にすることなく、光陰という時の流れに身を任せてしまわずに、今という時を十分に大切にして精進しなくてはならない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.15 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1344

これら賢者たちは、多かろうと少なかろうと、一日のうちの時間を、むだに過ごしてはならない。一夜を無益に捨てるならば、それだけあなたの生命は減ずるのである。（『テーラガーター』）

＜解説＞時を無駄にしてはならないという教えは多い。それは、この世は無常だからだ。「すべては無常である、怠ることなく実践し、修行を完成しなさい」は弟子たちへの釈迦の遺言でもあった。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.16 中村元記念館協力

中村 元 慈しみの心 No.1345

愛欲におぼれた人は、まるで松明を手に持って、風に逆らって歩いて行くようなものだ。愚かな人は火を消さないでいると、必ず手に火傷を負って痛い目をするだろう。（『四十二章経』）

＜解説＞むさぼり、いかり、愚かさの三つの毒は人の身体の中にあるともいう。それは火のついた松明に例えられる。自ら発した炎によって、自分自身を焼くまえに、火を消さなくてはならない。

服部育郎・中村元東方研究所専任研究員

2019.8.17 中村元記念館協力